阿富汗問題

文學士　大川周明

一　亞富汗王の暗殺

亞富汗王ハビブラー汗が、本年二月二十日拂曉、ラーグマンの幕營に於て、何者かの爲に暗殺されたと云ふ報道は、吾等中央亞細亞問題研究者の大なる注意を喚起した。而して其後に接手せる英國並に印度諸新聞の記事によりて、吾等は亞富汗王の橫死に關する稍々詳細なる事實を知り得た。

『タイムス・オヴ・インディア』によれば、ハビブラー汗の暗殺者は、亞富汗軍總司令官ナディール・シャーの弟アーマッド・シャーで、兇行の現場に於て逮捕されたが、ナディール・シャーの到着と共に釋放されて仕舞つた。幾くもなくして當時ジェララバードに居た王弟ナスルラー汗がラーグマンに急行し、故王の死骸をジェララバードに送りて埋葬すべきことを命じたが、王位相續者決定以前に之を埋葬するを不可とする說が勢力を占めたので、自ら卽座に王位踐祚を宣言し、故王の長子にして皇太子と定まれるイナヤツツラ汗を脅迫して該宣言を承認せしめ、同時に軍人の俸給を一個月十二ルピーより十六ルピーに上げた。

然るに一方國都カブールに於ては、故王の第三子アマヌラー汗を擁立して、ナスルラー汗及びナディール・シャー將軍を排斥するの運動を起こし、アマヌ

「道」第137号(1919.9)

ラー汗は軍人の俸給を一個月二十ルピーとす可きことを聲明して、一擧軍隊を味方にすることが出來た。

之に加ふるに、大藏大臣フサインを首領とする一團は、皇太子イナヤツツラを擁立せんと企て、軍隊の給料を倍加せんことを提議したが、事を擧ぐること遲かりしため、フサインはアマヌラ黨の爲に捕へられて激しき鞭韃を蒙むれる上、驢馬に乘せてカブールの市中を引廻された。

斯くの如くにして短期間の紛糾の後、アマヌラー汗の與黨が、確實に優勢を占め、アマヌラー汗は亞富汗王位を繼承し、國民に向つて亞富汗斯坦の自主獨立を確保するに努むること、父王暗殺者に復讐を加ふべきこと、專制壓迫を行はざること、施政を改革して亞富汗斯坦を世界文明國と伍せしむるに拮据すべきことを宣言した。而してナスルラー汗及び新王の兩長兄は、新王に對して服從を誓ひ、且先にはナスルラー汗に與せるジェララバード軍隊の將校百七十五名も、同じく新王に歸順して忠誠を勵むべきことを宣誓した。幾くもなくしてナスルラー汗は、故王暗殺の張本人として牢獄に投ぜられ、親王妃の父マームード・ファルゼは外相に、サレー・ムハマツド・ニアブ・セフサラルは軍司令官に、而して一土耳古人ザイエッド・マームード汗が陸相の要職に任ぜられた。

而して三月初旬、英國議會に於て、有名なる東洋通サー・リースが亞富汗問題に關して試みたる質問に對し、敎育會議總裁フィッシャーは、印度事務大臣に代つて下の如く答えて居る。曰く『最近の報告によれば、故王の死後直ちにジェララバードに於て卽位を宣言せるナスルラー汗は、幾くもなくして位を辭し、故王の第三子アマヌラー汗王位を繼ぎ、現在はカブールに於ても並にジェララバードに於ても格別不穩の形勢が無いらしい。故王の暗殺に關する

多數の嫌疑者が逮捕されたと云ふ報告に接したが、犯罪の目的及び逮捕者の姓名等はまだ之を知り得ない。アマヌラー汗とナスルラー汗との關係、並に王長子イナヤツラー汗の兩者に對する態度も尙ほ不明である。最後に附言すべきは、英國民はハビブラー汗の不幸なる崩御により眞個の一友人を失つたと云ふことである。戰時を通じて、故王の政策及び態度は、一貫して聯合軍の爲に最も忠實であつた』と。

二　故王暗殺の眞相

然るに其後に傳へられたる故王暗殺の眞相は、實に世界を警倒するに足るものがある。固より此の眞相なるものも、果して如何なる程度まで信を措くに足るかは疑問であるが、其の一見意表に出づるが如き經緯の間に、成程と思はるゝ節があり、且其後に起れる亞富汗の印度侵入問題に對しても、少なからぬ光明を投ずるものがある。

其の眞相と云ふのは、五月二十九日附で在印度孟買の『倫敦デーリー・クロニクル』通信員の發した長文の通信に現はれたもので、材料の出處は昨年六月以來亞富汗斯坦のジエララバードに駐在し、最近印度に逃げ歸つた一工兵將校マックローグリンの談話である。此の通信は今日迄に發表された記事のうち事變目擊者の談話によれる唯一且最初のものである。

該談話者の言に據れば、國王暗殺の根本的動機は故王の親英主義に對する國民の甚だしき不滿であつた。若干の有力者は、世界大戰の尙ほ酣なりし頃、宗敎的に彼等の宗主國たる土耳古を扶け、英國に宣戰して印度を侵略すべしと云ふ强硬なる主張を發表し、且之を遂行せんが爲に一個强力なる團體を組織した。彼等をして玆に出でしめたのは、其の背後に獨逸並に土耳古の熱心なる勸請又は助力ありしこと

云ふまでもない。然るに彼等の計畫を實現するに最も好ましからぬ障碍は、堅く親英主義を執つて動かざりし故王ハビブラー汗であつた。是に於て此一團の排英主義者は、遂に國王暗殺の計畫を立てた。

この過激なる陰謀團の中樞人物は、マックローグリンの語る所によれば、驚く可し現に王位に卽ける故王の第三王子アマヌラー汗並に其叔父ナスルラー汗で、有力なる親衞軍の軍人多く之に與みした、而して最初の申合せは、暗殺成功後はナスルラー汗王位を繼承し、アマヌラー汗はカブルー總督となり、當然起る可き事變後の騷亂に善處するの手筈であつた。

是より先、該陰謀に加はつた親衞軍々人のうち三名の將校は、故王の王女を夫々賜はると云ふ婚約が出來て居た。然るに如何なる理由があつたか、故王は容易に此の約束を實行しやうと爲ぬので、陰謀團の一味は、的きり故王が彼等の陰謀を感付いたものと推量した。そこで豫期の準備が十分に整はぬうち、至急暗殺を決行することになつた。而して最初に述べた通り、本年二月二十日の拂曉に、彼等は遂に兇行の目的を遂げた。

三　故王暗殺後の局面

故王暗殺の目的を遂げた後、陰謀團は豫てのプログラムに從つて、アマヌラー汗は國都カブールに於て貴族を會合して父王の崩御を告げ、ナスルラー汗が王位を繼承すべきことを告げた。然るに貴族等は何故に王長子が繼位せずして王弟が卽位するやと反問した。アマヌラー汗は、何等の說明を與へない。すると貴族等は、王長子が父王暗殺者に報復するの手段を講じつゝある乎と質問した。之に對してアマヌラー汗は、王長子が何等の手段をも講じて居らぬと告げた。貴族等は王長子は怯者なるが故に王位を繼ぐに値せず、アマヌラー汗自ら卽位す可しと主張

した。そこでアマヌラー汗は、野心むら〱と起り突嗟の間に叔父ナスルラー汗との約束を破つて、自ら國王たるべきことを宣言して仕舞つた。

一方カブールに於て豫定の献立が急に轉變しつゝありし時、故王に信服せる一團の兵士は、ジェララバードに駐屯中であつたが、故王の横死を悲しみ、自ら起つて暗殺者に復仇を加へんと決心し、一切の士官を放逐して『兵士會』を組織し、故王暗殺の現場に歩哨せる兵士を糾問して、其の兇行者が亞富汗軍總司令官の弟なるを確かめ、該總司令官ナディール・シャー及び其一族を捕へて之を極刑に處せんとした。

アマヌラー汗は國都に於て此變を聽き、急遽『兵士會』に電話をかけ、彼等の忠勇を稱揚し、且一切の捕縛者は之を裁判に附して嚴刑に處すべきが故に急ぎカブールに送致すべきことを求めた。而して『兵士會』が此要求に應じて、カブール軍隊の勢力圏内まで四人を護送し來るや、兵力を以て四人を奪還し直ちに之を釋放せしめた。かくて軍司令官の一族は大手を振つて國都に入るを得た。

アマヌラー汗は、種々なる方法を以て軍隊の歡心を買つたので、今や確實に權力を掌握した、そこでナスルラー汗は遂に新王に對する服從を誓ひ、他の王族も悉く之に傚つた。而してナスルラー汗は、新王に敬意を表するため、ジェララバードからカブールに赴くと、直ちに故王暗殺嫌疑者として、捕へられて投獄せられ、王長子も亦父王の横死に處して適當なる手段を講ぜざりし罪名の下に監禁せらるゝに至つた。

國王暗殺は、誠に一國の大事であるから、如何に亂暴な亞富汗斯坦でも、長く之を有耶無耶の間に放置する譯に行かぬ。そこで人身御供に上げられたのは、故王暗殺の現場で故王を守護して居た聯隊の長官たりし一大佐である。アマヌラー汗は即位式擧行

に際し、該大佐がナスルラー汗の教唆によりて兇行を遂げたることは證據最も十分なりと云ふことを宣言し、終に即座に之を銃刑に處した。

これでハビブラー汗暗殺事件は、何うなり斯うなり段落を告げ、アマヌラー汗はマンマと王位を占めたが、最も馬鹿を見たのはナスルラー汗である。

四　亞富汗の印度侵入

さて亞富汗王暗殺の眞因が、尙ほ五里霧中に在りし間に、世界は更に亞富汗の印度侵入と云ふ報導に驚かされた。此の侵入の原因に就ても、揣摩百出の有樣で、或は新王が國內の紛糾を防ぐために人心を外に轉ぜんとする舊套手段なりと謂ひ、或は英國が何事か爲すあらんが爲に其の外交的辣腕を振つて試みたる反間苦肉の煽動に乘ぜられたるなりと謂ひ、或はウィルソン先生が種を蒔きたる民族自由獨立熱の一發現なりと謂ひ、或は露國過激派運動の影響なりと謂ひ、各人各樣の觀察を下したが、若し吾等が前に述べたる所を眞實とすれば、印度侵入は國王暗殺の當然の結果で、國王暗殺の大逆は、唯だ印度侵入の爲の必要なる序幕であつたのである。

されば今後の亞富汗戰爭は、細々しい近因は第二として、其の根本の原因は、歐米諸國が回敎諸國に對して加へたる壓迫に對する積年の悲憤が勃發したものと見る可きである。殊に媾和會議に於て、聯合諸國は土耳古の歐羅巴放逐を決定し、回敎徒の宗主國たる土耳古をして、小亞細亞の一弱少國たらしめんとして居ることが、近東及び中東の回敎徒をして怨嗟憤激せしめたことは疑ひない。して見れば亞富汗の無謀なる印度侵入も、利害得失は別問題として其の心事に至つては無理もないことであらう。

併し之を實際の結果より言へば、今度の戰爭は、亞富汗人には極めて不利、英國には最も有利なる結末を告げるであらう。五月に侵入を試みたる亞富汗

軍は、事實敗北に敗北を重ねて、遂に休戰を請ひ、現に講和談判の開始中である。

元來、亞富汗は英國の保護國として外交のみを英國に委ね、王は年々二百十萬圓を英國より受け、内政に於ては全く獨立し、鎖國主義を以て外人の出入を許さず、三代の王は相踵いで親英主義を執つて來たに拘らず、僅に一人の英人を國内に駐めしむるのみ、國情は殆ど不可解であつた。

そこで平和恢復後に、英國は之によりて如何なる利益を得るか。想ふに亞富汗人の血氣に逸れる印度侵入は、カーゾン卿の多年の持論であり、英國朝野の宿望である『カルカッタ、カイロ』鐵道の實現に絕好の機會を與ふるものではなからうか。千九百〇七年の英露協約は、カルカッタ鐵道を亞富汗の東境チヤーマンに阻み、露國の鐵道をクシクに阻み、相互睨み合ひの形にて亞富汗國内に一歩も鐵道を敷き得なかつた。露國の勢威潰滅せる今日、英國が亞富汗の反亂征服を機とし、チャーマン、クシク鐵道連絡策を樹つるに至るは必然であらう。而して南方にはカスピアンの東部を經て波斯テヘランよりバグダット鐵道に出る一線、北方にはオムスク政府支援の代償として、中央亞細亞タシユケントを經てサマラに出づるの線を獲得し、更に一歩を進めてタシユケントよりトムスクに通ずる鐵道敷設權を握り、中央部にはカスピアン海を經て高架索橫斷線（所謂甲谷陀、カイロ線の中心）を得なば、英國の鐵道網は『カルカッタ、カイロ』線を中心に、バグダット、莫斯科中部西伯利亞に鶴翼を張るの大規模なるものと成る譯である。既にバグダットに於て成功を收めオムスク政府を掌中に守り立て、居る機敏なる英國として斯の如きは決して一場の夢想でなく、現實の問題として着目しつゝある事論を俟たない。

形勢かくの如くにして進まば、亞細亞の大半が英國領土となるのも唯だ時日の問題であらう。吾等は此の有爲にして多幸なる吾が同盟國の爲に、萬々歲を三呼せん。

教談

由比正雪（後篇）

野口復堂

正雪の叛亂に對する他動的の煽動は紀州侯より、自動的は丸橋よりと前回に申上げましたが、丸橋の自動は說明致す迄もありませんから、紀州家の他動を申上げる事に致しますが、抑も紀州家當代の主人は前申上げた大納言賴宣卿で、神君家康公の第六男で、神君沒後は其の御隱居地たりし、駿遠二州七十萬石の後を相續し、將軍と同樣の旗幕印を免るされて、同族尾州と水戶の上に立て、三家中特殊資格を有する者とて、大威張りに威張て居られたが、二代秀忠は豫て賴宣の英明を忌み居らるゝ事とて、賴宣を紀州に移封し、駿遠七十萬石は幕府へ沒收した。其所で賴宣幕府を怨むこと骨髓に徹し居る中に、二代將軍も三代將軍も他界されて、當將軍家綱は尙ほ幼沖、輔佐の正之は二代秀忠の實子なれども妾腹の出、すると賴宣は天下に憚る者はない、「我は我儘の勝手魚なりいづれよりか水來つて、我を大海へ導けよ」と、天下を睨み回すうちに、「我は大魚を大海へ導く水なり」と言はん許りの正雪に會つて見れば、成る程兵書講義の名の下に好乎の相談相手なり。正雪が味方を慕るに紀州大納言の名を以てせしは、滿皿の許僞にあらず。正雪自殺後、正雪謀反に關聯せる書類にして賴宣卿署名捺印のもの數々露はれたので、松平伊豆守は紀州家に參り、賴宣卿を前にして取調中、次の間に「叫つ」とのさけび聲、之は小姓